

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 20日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21390580

研究課題名（和文） がん医療・看護における倫理症例集作成の試み

研究課題名（英文） An attempt to making of the case studies in ethics on cancer nursing

研究代表者

中尾 久子（NAKAO HISAKO）

九州大学・医学研究院・教授

研究者番号：80164127

研究成果の概要（和文）：がん患者の増加に伴ってがん医療は進歩し、診断・治療や看護の充実が図られてきた。しかし、臨床場面ではがん患者への告知や治療の選択など、倫理的判断が難しく十分な対応ができていないと考えられるケースが生じており、医療従事者の倫理的対応の充実が求められている。看護者の倫理的対応力の充実を図るために、がん医療・看護の場面で看護職者が遭遇する倫理的問題の特性および倫理的問題を含む症例を調査して内容を検討し症例として提示することを試みた。

研究成果の概要（英文）：The cancer medical care has progressed with increase of cancer patients, and the diagnosis, treatment and nursing of cancer has been improved. However, in the course of treatment/nursing, it is difficult in some cases to make ethical decisions such as on bad news telling to cancer patients and the choice of treatment, and doctors and nurses can not cope well with such difficult situations. The ethical approach to handle such situations, therefore, needs to be improved. We examined the ethical issues and its characteristics included in the cases where nurses may encounter in the clinical settings, and attempted to provide a “case studies” for nurses, aiming to improve their ability to address the ethical issues.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
総計	5,300,000	1,590,000	6,890,000

研究分野：基礎看護学

科研費の分科・細目：基盤研究（B）

キーワード：がん医療・看護、倫理症例、チーム医療、倫理的対応

### 1. 研究開始当初の背景

1980年代前半に米国から日本に紹介されたバイオエシックスは生命倫理学として独自に展開し、我国の医療・保健活動に大きな影響を与えてきている。インフォームドコンセント：説明と同意（IC: Informed Consent）の推進、ホスピスの健康保険制度への組み込みなどととともに、全国の大学病院や多くの総

合病院に倫理委員会が設置されてきた。

また、終末期医療や出生に関する医療、認知症高齢者の医療のあり方などは、医療の場だけでなく関係学会や社会全体においても大きな問題になってきている。このような問題へのより良い対処を模索して、生命倫理学の研究や教育が進んできている。

これらの研究・教育活動と関連して、看護

倫理学の教育・研究も発展してきている。1970年代にICN（国際看護師協会）から世界各国の看護師が遭遇する倫理的ジレンマについてのケースを提示した「看護婦のジレンマ—業務における倫理の諸問題」が出版された。その後、米国では看護学者によって看護倫理の理論化について議論が行われ、教育・研究が発展してきた。近年、我国でも看護全体の基盤を支えるものとして看護倫理の重要性を捉え、教育・研究を発展させようとしている。

しかし、これまでは看護倫理学に対する重要性や必要性は認識されていたが、教育内容や教育方法については十分に検討されてこなかった。医療倫理に関する教材では、米国の先行研究を参考に日本の医学、哲学、倫理学、法学の研究者が中心となって事例研究を進めてきた。また国内には学際的にまとめられた事例集が出版されているが、編集・執筆者の多くが医師、哲学・倫理学者、法学者であり、医療の場における看護師の倫理的視点が反映されにくいと言えよう。

看護師は医療チームのメンバーとして医学的側面とともに心理的・社会的側面をアセスメントし、患者を生活者として捉えケアする特性をもっており、他の医療職と立ち位置や役割の異なる看護師の倫理的視点は重要だと考える。近年、看護師がまとめた事例集も出版されているが、看護師はあらゆる保健医療福祉の場で活動しており、看護師の倫理的問題の検討に用いられる事例となる教材はまだ少なく教材が欠如していると言えるだろう。

我国では1980年代以降、死因別死亡率でがんの死亡率第1位が続いている。医療の場では、がんの発見から終末期までの様々な段階において、診断、治療、ケアと関連するIC、治療選択、終末期医療など患者、家族の倫理的問題状況に遭遇する機会が多い。しかし、例えばがんの進行に沿って、終末期医療の具体的な選択について患者と話すことなど、実際の対処が難しいこともあり、十分に患者、家族の意向を反映した医療や看護が行えているとは言えない状況もみられる。

がんの専門的な医療や看護については、様々な角度から研究が進んでいるが、がんの医療・看護の倫理に焦点をあてた研究は国外に比べても多くはない。また既存の研究内容は、緩和医療、終末期医療の倫理問題が主となっていることが多い。しかし、がんは対象者が様々な経過を辿ることから、診断直後から、急性期、回復期、慢性期、増悪期、終末期と異なる局面のがん患者の倫理問題は非常に重要な問題だと考えられる。

そこで、がん患者の医療・看護におけるケースを調査して提示することで、看護師の倫理的問題の検討に用いることができ、患者の

生命・人権の尊重および生活の質を支援する看護師の倫理的問題の検討が深まることが期待される。

## 2. 研究の目的

日本のがん医療・看護場面で看護職者が直面する倫理的問題を調査し、問題の背景要素を検討して倫理症例集の作成を試みる。

## 3. 研究の方法

まず、日本および海外（主に米国）の医療倫理および看護倫理の文献の検討を行い、現在の日本のがん医療、がん看護で基本的に必要とされる倫理症例集の内容を検討する。

次に、日本におけるがん医療・がん看護の現場で倫理的な問題に遭遇したケースの収集を行う。がん医療・看護に従事する看護師を対象として質問紙調査（1次調査）を行う。また、国内外のがん専門医療施設および研究機関などにおいて情報収集を行う。続いて、がん医療に従事する看護職などの医療従事者で本研究の趣旨を理解して調査に協力可能な対象者に面接調査（2次調査）を行う。

調査で得られたデータおよび、がん専門医療施設の倫理に関する情報について分析を行う。質問紙調査（1次調査）のデータは、記述統計および属性による差の検定を行う。面接調査（2次調査）で得られたケースの情報はがん医療・看護の倫理問題に関する内容を抽出しデータ分析を行う。収集されたケースを比較検討して、内容を分析することにより、各ケースの共通部分とケースごとの特殊な部分を抽出しケースの類型化を図る。これらの結果の検討を繰り返し症例の整理とまとめを行う。

## 4. 研究成果

### (1) 文献検討

まず、国内外の医療倫理・看護倫理の事例集約25冊について総説的な検討を行った。さらに本研究の目的からがん医療・看護に関連する事例集の中でがん医療・看護に関連する内容を中心に分析を行った。

その結果、がん医療・看護に関する国内外の文献で主な倫理的問題として、告知、IC、コミュニケーション不足、患者の自律性、意思決定、治療選択、医師—患者関係、終末期医療、治療の限界、DNR：蘇生措置拒否（Do Not Resuscitate）、ケアリング、文化的問題、医師—看護師の対立があった。日本の文献では、告知、IC、医師—患者関係（パターナリズム）、家族の意向の優先、終末期医療、安楽死、セデーション（鎮静）などがあった。

以上より、告知（病名、予後）、患者の自律性、患者—医師関係、家族の意向、終末期医療などの問題に加えて、治療の選択肢の増加、価値観の多様化などに伴って臨床の場の倫理的問題は複雑になっていることが考えられた。そこで、これらの要素も視野に入れて事例を収集することを確認した。

(2) がん医療に従事する看護師を対象とする質問紙調査：1次調査

がん診療拠点病院の看護師200名と、がん医療・看護に関連する認定看護師教育課程で学ぶ看護師75名を対象として倫理的問題の認識について調査を行った。また倫理的問題を感じた事例について記述を依頼した。

がん診療拠点病院勤務の看護師149名と、認定看護師課程で学ぶ看護師65名から有効回答を得た。がん診療拠点病院勤務の看護師は女性が96.6%、年代は30代が最も多く、経験年数は10～19年が41.5%だった。がん医療・看護の場における倫理的問題の認識では、時々感じる67.8%、あまり感じない21.1%、よく感じる10.3%だった。問題が生じやすい時期は、終末期84.7%、急性期57.6%で、延長された時期30.6%、長期安定期20.8%だった。体験した主な倫理問題は、IC68.1%、家族が告知を望まない63.2%、終末期医療50.7%、緩和ケア41.0%、医学的に合理的でないと考えられる治療選択40.3%、患者の自律性の尊重38.2%、患者と家族の意見の違い37.5%であった。倫理的問題が生じた時の話し合いでは、医師、患者、家族、看護師間の話し合い58.0%、多職種カンファレンス53.8%、看護師カンファレンス51.7%があった。

認定看護師教育課程で学ぶ看護師は女性が95.4%、年代は30代が最も多く、経験年数は10～19年が55.4%だった。がん医療・看護の場における倫理的問題の認識では、よく感じる58.5%、時々感じる36.9%、あまり感じない4.6%だった。問題が生じやすい時期は終末期90.8%、急性期72.3%で、延長された時期49.2%、長期安定期41.5%だった。体験した主な倫理問題は、医師と看護師の意見の違い84.6%、IC83.1%、家族が告知を望まない83.1%、患者の自律性の尊重75.4%、患者と家族の意見の違い73.5%、患者の意思が不明66.2%、意識レベルが低下した患者の人権64.6%であった。倫理的問題が生じた時には、看護師カンファレンス63.1%、医師、患者、家族、看護師間での話し合い58.5%、多職種カンファレンス33.8%を行っていた。

以上より、がん医療・看護に従事している看護師の中でも、専門的な教育を受けることにより倫理的感受性が高まり、倫理的問題を認識し対処する能力の向上が期待できると考えられた。

また、がん医療・看護に関して倫理的問題を感じた事例では118事例の記述があった。事例の患者は50歳代以上が80%以上で、60歳代を中心として50～70歳代の患者が全体の2/3を占めていた。倫理的問題を感じた患者の病期は、治療を行っている時期と終末期が多く、治療中の時期では、どこまで、いつまで積極的治療をするか（治療効果、合併症

による苦痛)、治療効果が不明確な代替療法の選択、病名や治療効果の告知があった。終末期では、積極的治療の希望、緩和ケア、退院や緩和ケア病棟・ホスピスへの移動に対する意見の違い、セデーションの選択、延命治療(どこまで、いつまで)、予後・余命告知、DNRに関する内容が多かった。

②国内外のがん専門医療施設における倫理に関する情報収集：

国内のがん診療連携拠点病院の緩和ケアチームの活動に参加し、がん患者に対する専門医療チームの活動を通してチームメンバーから情報収集を行った。

緩和ケアチームは依頼に応じて患者の身体面の疼痛緩和とともに心理・社会的側面も含んだケアを行っていた。定期的な回診のほか、治療の意思決定の支援や、家族のいない患者への終末期医療・セデーションなど判断が難しいケースに対しての対応を行っており、病棟の医師や看護師と連絡を取り情報共有しながら対応を進めるチーム医療のあり方、患者の自律性や最善の利益に配慮した対応の重要性が見いだされた。

国外では、米国のジョージタウン大学(がん専門医療センターのある大学病院を併設)の生命倫理・臨床倫理の教育研究センター管理者で同大学ケネディ倫理研究所の教授と、Washington, D.C.にある総合病院の倫理委員会委員長に面会し、米国におけるがん医療・看護の倫理的問題について情報収集した。

インタビューより、①治療の限界と無益性、②延命拒否の問題、③自殺幫助の問題、④公平性(医療保険・経済)、⑥公共の教育(Advanced Directive:事前指示書や、Living Will:生前の意思表示の普及)の問題の存在が見いだされた。

以上より、がん医療・看護の倫理に関する調査結果を分析・検討し、倫理事例集に必要な内容を選択した。

(3) がん医療に従事する看護師などを対象とする面接調査：2次調査

本研究の趣旨を理解して調査に協力可能ながん拠点病院の医師、看護師、認定看護師、総合病院の看護師、看護教育研究者を対象に面接調査を行った。

収集されたケースを比較検討して、内容を分析することにより、各ケースの共通部分と事例ごとの特殊な部分を抽出した結果、共通部分として、IC、告知、患者の自律性、家族の意思や関わり、医療従事者の価値観・責任と対応、意思決定、医学的適応、治療選択、QOL、コミュニケーション不足などがあった。

また、各ケースの特殊な部分として、過去の治療体験、家族のあり方、治療による合併症と積極的治療、認知高齢者への治療、移植医療のドナー決定、医師および病院の方針、機能分化した医療システム、生活背景・経済

の問題、偏った医療情報収集による医療不信、近親の医療従事者の介入、医療保険制度の矛盾などの課題があった。

(4) 得られたケースの分析と事例提示のための検討・整理

得られたケースの分析・検討を行うことにより、がんの病態の特性、基本的治療、告知、IC、がん（悪性腫瘍）に対する患者の心理、医師-患者関係の重要性などは同様だが、医療技術の進歩、治療の選択肢の増加、価値観の多様化、家族のあり方の変化、医療情報のIT化、医療保険制度の変化、人口の高齢化などに伴って倫理的問題が複雑化していることがわかった。

これらのケースの比較検討を通して、収集されたがん医療・看護のケースは、①がんの病名・病状・予後の告知、IC、②終末期医療（延命治療）のあり方、③治療に関する意思決定（効果と害）、④患者の意思・自律性と周囲の状況、⑤家族と患者の関係性（介入、不在、依存）、⑥医療従事者（医師、看護師）の専門的責務、⑦がんとともに生きるサバイバーの生活・QOL、⑧専門細分化した医療システムと継続的医療・ケア、⑨社会・経済的問題を含むケースにおおむね整理することができた。

ケースの提示と議論の枠組みについては、先行研究において既に様々な方法が提示されている。先行研究を検討しながら、現在の日本における症例提示のあり方を議論した。種々検討した結果、症例提示のあり方と枠組みは先行研究を参考として、キーワード、ケースの紹介と経過、アセスメント（身体、心理・社会）、看護目標、症例の分析、問題への対応、解説を含む看護者の視点を生かした方法とした。

なお、これらのケースをまとめるにあたっては倫理的問題の特性を損なわないように、かつ個人情報保護に十分配慮して情報を取り扱い、整理を行った。

これらのケースや関連情報を基に分析や議論を行い、新しい知見も加えて、我国の現状のがん医療・看護の場面に適し、医療・看護の質向上に役立つと考えられる症例を選択し、研究者間で検討して症例の整理とまとめを行い、素案を作成した。今回まとめた症例は主にがん医療・看護に従事する看護者や看護を学ぶ学生の教育に用いることができると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5+4 件）

①Mitsuyo Nakashima, Shoji Kuroki, Harumi Shinkoda, Yoshiko Suetsugu, Kazuo Shimada,

Tsunehisa Kaku : Information-Seeking Experiences and Decision-Making Roles of Japanese Women with Breast Cancer, *Fukuoka Acta Medica*, 103(6), 120-130, 2012, 査読有.

②長 聡子、川本利恵子：一般病棟におけるがん患者の家族ケアの実践評価の実態（第2報）、*International Nursing Care Research*, 4(10), 55-60, 2011. 査読有.

③長 聡子、川本利恵子：一般病棟におけるがん患者の家族ケアの実践評価の実態（第1報）、*International Nursing Care Research*, 3(10), 19-26, 2011, 査読有.

④中尾久子、中尾富士子：病棟スタッフの倫理的感性を磨く効果的な教育方法、*ナースマネージャー*, 11(12), 17-21, 2010, 査読無.

⑤松崎彰信：二次がん、1歳の頃、Wilms腫瘍で手術、放射線治療、化学療法を受けた18歳の男子です。貧血で検査したところ、白血病と診断されショックです、*小児外科*, 41(8), 881-883, 2009, 査読無.

〔学会発表〕（計 14+18 件）

①土屋美智子、山川文子、中尾久子：緩和ケアにおける倫理的側面に視点を置いた教育の試み、第27回日本がん看護学会学術集会、2013.02.16、金沢.

②Hisako Nakao, Akiko Chishaki, Mami Miyazono, Yumiko Kinoshita, Maki Kanaoka, Akiko Tomioka, Chie Magota, Miyuki Ushio, Kohei Kajiwara : Nurse's Recognition of Ethical Problems on Cancer Care in Japan - Comparison between University Hospital Nurse and Certified Nursing Students, The 16th Development International Networking for Nursing Research, 2013.02.21. Bangkok, Thailand.

③中尾久子、樗木晶子：大学における看護倫理の教育の取組み—人権と人間の尊厳について—、日本生命倫理学会第24回年次大会、2012.10.28、京都.

④Hisako Nakao, Akiko Chishaki, Rieko Kawamoto, Mami Miyazono, Yumiko Kinoshita, Maki Kanaoka, Akiko Tomioka, Chie Magota, Miyuki Ushio: Clinical Ethics Education on Cancer Nursing in Japan, the 17th International Conference on Cancer Nursing (ICCN), 2012.09.12, Prague, Czech Republic.

⑤Hisako Nakao, Akiko Chishaki, Rieko Kawamoto, Nakao, Mami Miyazono, Yumiko Kinoshita, Maki Kanaoka, Akiko Tomioka, Chie Magota, Miyuki Ushio: Expert nurse's recognition of ethical problems on cancer care, RCN:7th International Nurse Practitioner/Advanced Practice Nursing Network Conference, 2012.8.20, London, United Kingdom.

⑥木下由美子、川本利恵子、中尾富士子、中尾久子：直腸がんで部分内肛門括約筋切除と超低位前方切除術を受けた患者の術後1カ月における排便機能障害とその対処行動の比較、第26回日本がん看護学会学術集会、2012.02.12、松江。

⑦金岡麻希、宮園真美、木下由美子、富岡明子、孫田千恵、潮みゆき、中尾富士子、中尾久子、川本利恵子：生体肝移植のレシピエントとドナーの周手術期における交流の実態とその相互作用、第31回日本看護科学学会、2011.12.2、高知。

⑧中尾久子、樗木晶子：大学院修士課程（専門看護師：CNS教育課程）における倫理教育の取組み—がん患者の医療・看護の症例を通して—、日本生命倫理学会第23回年次大会、2011.10.16、東京。

⑨Hisako Nakao, Takae Fujimura, Tomie Nagakawa, Akiko Chishaki, Fujiko Nakao, Mami Miyazono, Yumiko Kinoshita, Maki Kanaoka, Akiko Tomioka, Rieko Kawamoto : A difference of awareness to the ethical issues by nursing license in Japan, Sigma Theta Tau 22nd International Nursing Research Congress, 2011.07.11, Cancun, Mexico.

⑩Hisako Nakao, Akiko Chishaki, Fujiko Nakao, Rieko Kawamoto : Nursing Education for the End-of-Life Cancer Patients in Japan, Palliative Medicine and Supportive Oncology, The 14<sup>th</sup> International Symposium, 2011.03.10, Florida, United States of America.

⑪中尾久子、中尾富士子：看護の場の倫理的問題の特性—がん患者の看護で感じる問題と対処—、第25回日本がん看護学会学術集会、2011.02.13、神戸。

⑫Hisako NAKAO, Fujiko NAKAO, Akiko CHISHAKI, Yumiko KINOSHITA, Maki KANAOKA, Mami MIYAZONO, Rieko KAWAMOTO : Ethics Education on Cancer Nursing in Japan, The 16th International Conference on Cancer Nursing, 2010.03.10, Atlanta, United States of America.

⑬中尾久子、赤林朗、大林雅之、家永登、樗木晶子：倫理的問題に対する病院の組織的取組みの現状と課題—倫理委員会と症例コンサルテーションを中心に—、日本生命倫理学会第21回年次大会、2009.11.15、神奈川。

⑭中尾久子、樗木晶子：医療の場における倫理的問題への組織的取組みの現状と課題—看護師の面接調査を通して—、第29回日本看護科学学会学術集会、2009.11.27、千葉。

〔図書〕(計 3+1件)

①中尾久子：難病患者の医療・ケア—看護職の立場から、シリーズ生命倫理学 高齢者・

難病患者・障害者の医療福祉、丸善出版、2331 (123-146)、2012.12。

②中尾久子：看護倫理、ベーシックナーシング (改訂版)、高久史磨・樗木晶子監修、メディカルレビュー社、849(155-156)、201.10。

③中尾久子：看護倫理、ベーシックナーシング、高久史磨・樗木晶子監修、メディカルレビュー社、851(D-3~4)、2010.01。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中尾久子 (NAKAO HISAKO)  
九州大学大学院医学研究院・教授  
研究者番号：80164127

### (2) 研究分担者

川本利恵子 (KAWAMOTO RIEKO)  
九州大学大学院医学研究院・教授  
研究者番号：40144969

樗木晶子 (CHISHAKI AKIKO)  
九州大学大学院医学研究院・教授  
研究者番号：60216497

加来恒壽 (KAKU TSUNEHISA)  
九州大学大学院医学研究院・教授  
研究者番号：60185717

松崎彰信 (MATUZAKI AKINOBU)  
九州大学大学院医学研究院・教授 (2009年)  
研究者番号：90238999

中尾富士子 (NAKAO FUJIKO)  
九州大学大学院医学研究院・講師 (2009~2011年)  
研究者番号：40363113

宮園真美 (MIYAZONO MAMI)  
九州大学大学院医学研究院・助教 (2009~2010年)、講師 (2011年~)  
研究者番号：10432907

木下由美子 (KINOSHITA YUMIKO)  
九州大学大学院医学研究院・助教  
研究者番号：30432925

金岡麻希 (KANAOKA MAKI)  
九州大学大学院医学研究院・助教  
研究者番号：50507796

富岡明子 (TOMIOKA AKIKO)  
九州大学大学院医学研究院・助教 (2010~2012年)  
研究者番号：20437627